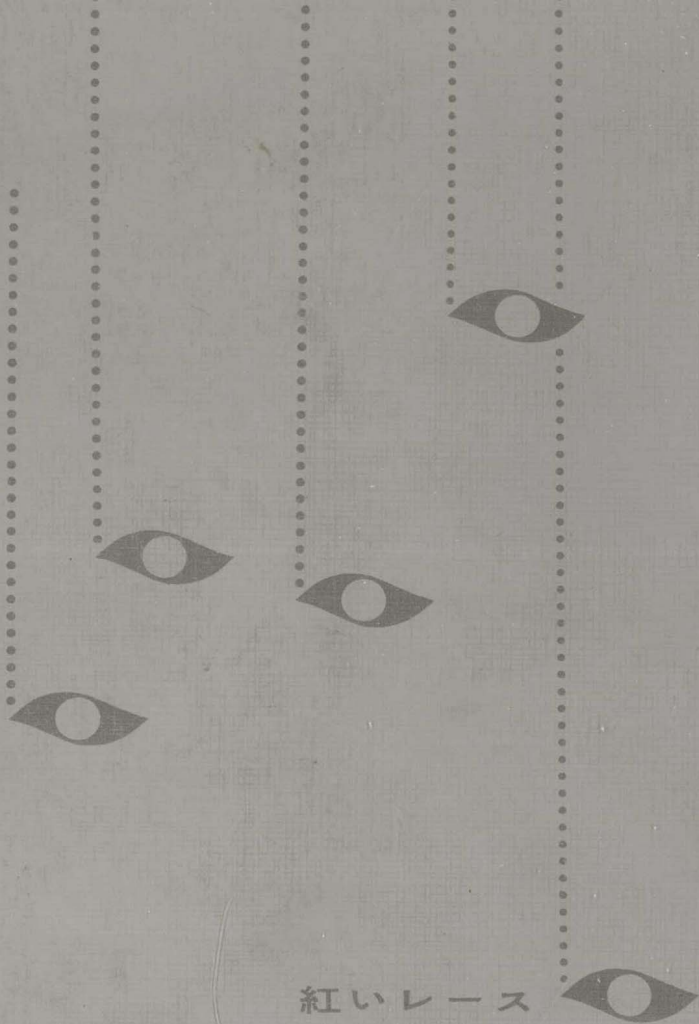




紅いレース

紅いレース 定価200円

昭和38年9月18日 第1刷発行

著者 樹下太郎

© Taro Kinoshita 1963

発行者 西村俊成

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 横田製本株式会社

発行所 東都書房

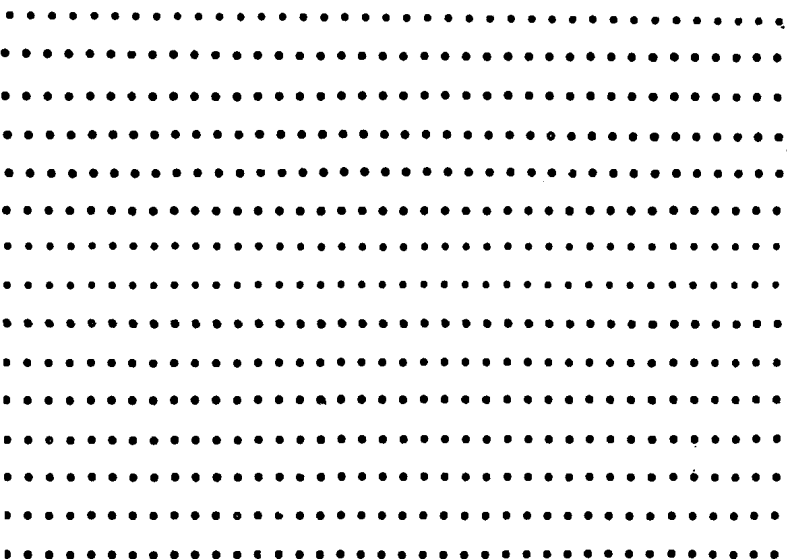
東京都文京区音羽町3丁目19番地
電話(941)3111 振替(東京)72732

落丁本乱丁本はおとりかえします

紅いレース

樹下太郎

東都ミステリー



目 次

I	女の花びら……………	7
II	たわむれの罪……………	20
III	海　　の　　宿……………	33
IV	悲しい売れっ子……………	46
V	家出常習の娘……………	59
VI	惜しかった夜……………	73
VII	スペインの牛……………	86

あとがき		183
XIII 花くれない		169
XII 初恋は遠く		155
XI 葉桜の季節		141
X いつも処女		127
IX 砂の上の花束		114
VIII マダム悲恋		100

構成 福島祥介
写真 富永 都

I 女の花びら

1

大井次郎にうす気味悪い毎日がつづいている。

「おまえはいのちを狙われているぜ、用心しろよ」

と、本気とも冗談ともつかず忠告してくれる仲間がいた。

「あなたは殺されるかも知れないわよ」

と、囁きかけてくる女性もいた。

そればかりではない。

「気をつけなよ——」

と、正体不明の電話がかかってきたりするのだった。
「誰がおれを狙っているのか……」

悪質ないたずらに過ぎないのだ、と思い込もうとつとめたが、脅えは、日夜かれのころにつきまとい離れなかった。実際に殺されかねない弱味をかれはもっていたからである。

放縦なドンファンであった。

そして、かれがその生命を日夜狙われる羽目に立ち至ったのは、六月二日、土曜日の夜更けにつくった詩が原因している。

詩ではなく死を綴ったということなのか。

女の下着は

蕾の中の花びら

好きなひとにだけ咲いてみせます

男は花びらを

ひとつひとつむしってゆきます

許してくれる

許してくれない

——くれる

——くれない

——くれる

ラストはくれないのうすい布でした。

大井次郎はデルクス・レコードの専属作詞家であったが、これはもちろんレコードになる歌詞ではない。

酔余、というより拒絶された夜、その悲しみを紛らわすべく、西銀座のバー『思案損』^{シヤンソン}の片隅で即興的につくったのである。

職業柄、なにかという詩をつくりたくなるのであった。『思案損』の壁に貼ってある『思案するのはやばなひと、シャンと一緒に酒をのめ』云々の落書きもかれが書いたものである。

『ラストはくれないのうすい布でした』というのは、別に女性特有の生理をシンボリックに表現したわけではない。明らかにそのとき彼女は紅い色のフレア・パンティを穿^はいていて、かれの詩のとおり、かれがそれを見届けるまで事態は進行したにもかかわらず、遂に拒絶されてしまったのであった。

愛される男を自認する大井としては、思いがけざる失敗である。一押し二押し三に押しというが、その夜、かれはかれらしくもなく、三で見事に押し返されてしまったのである。

「絶対に嫌！ 声を立てるわよ！」

と、彼女はそのときに至って冷徹な態度にかわった。

「ここまで誘っておきながら、そんな罪な話あるものか」

再びやさしく抱きかかえようとしたとき、

「いいえ、駄目！」

胸のあたりを両手で邪慳に小突かれ、厳しくはね返されてしまったのだ。

大井次郎は愕然とした。

女性にそんなあしらいを受けるなど、いままでに一度もなかったことだ。

やがて屈辱の思いがかれのこころを浸してゆく。

——怒りが生まれた。

「ぼくをからかったんだな？」

「いいえ、からかったりなんかしないわ。女と見れば遊びの相手としか考えないようなあなたに反省してもらいたかったの。ただそれだけよ。からかうどころか、あたしだって真剣だったのよ、今夜は……。——帰ってちょうだい。でも、もし、いつか、あなたが真剣にあたしだけを欲しくなったときがあったら、そのときはまたいらっしゃってね」

彼女、佐倉八重はベッドの上から下り落ちるようにして、床の上のスリッパを穿いた。薄いネグリジェの

下で、紅い色のかたちが鮮やかであった。

彼女はかれに警戒の視線を注ぎながらガウンを羽織ると、静かにドアをあけた。「おやすみなさい」と、かれにだけ聴きとれるような小さな声でいった。

立去るほかはなかった。

アパートの廊下には誰もいなかった。

階段に向かって三つ目がかれの部屋であったが、かれはその前を素通りして階段を降りていった。

とても、このまま眠れるものではない。

外は暗かった。

霧のような雨が降っているというより、空気をしめらせているといった感じだ。

八重は某商社の英文タイピストだという。

やや華奢な体つきではあったが、腰から太腿にかけての線は、さすが女盛りらしく、豊かな感じであった。抱いたときのしなやかさも想像したくなるうというものだ。切れ長な眼を中心とする顔立ちの魅力も、

どちらかというと外国女優のそれに近い。

同じアパートに住む大井がそんな彼女をほうっておくはずはなかった。

その夜、やっとネグリジエに着換えさせるところまで事が運んだというのに――

ドンファンめいた手馴れたしぐさと言葉が、彼女の反撥と警戒を買う結果になってしまったらしい。

佐倉八重のなまめかしい姿態が、しきりにかれの網膜にちらつくのであった。

失望といまいましたさをからだ全体に溢れさせて、かれは『思案損』の扉の中にはいつていったのである。

女の下着は、――と、酔いが深まるにつれて、かれは八重の鮮烈なイメージをバーのメニューの裏に綴っていた。綴るに従って、どうあっても八重を自分のものにしなければならぬという、はげしい思いに駆られるのを抑えることが出来なかった。

そのために、たとえ結婚という高価な犠牲を払う結

果におちいるとしても、とにかく、八重をほかのどんな男の手にも渡してはならないと考えた。

半分は執着、半分はドンファンの意地ということだろうか。

大井次郎、三十三歳。いまだに結婚しないのは、女に関しては不自由なく過ごしてきているからなのである。世の中の女はみんなおれのものさ、という不敵な驕りもかれにはあったのだった。

八重のどたん場の拒絶は、かれにとってまさに空前の出来事だったのだ。

ラストはくれないの――と、最後の一行を書き終えたとき、かれはそれをまるめて捨てようとした。

落書き、ざれごとの類は書いている間だけに楽しみがあるのだ。

まずかったのは、そのとき作曲家の小杉昌平がやってきて、かれの隣の席に腰をおろしたことである。小杉もまたデルクス・レコードの専属であった。

まるめようとしたとき、

「見せろよ」

と、小杉は横合いからそのメニューを奪った。

「よせよ、落書きだ」

「その落書きから傑作が生まれたことだってあるじゃないか」

それは事実だった。ベストセラーになった『森の噴水』は、大井の『思案損』での落書きから出発している。

「こいつはすげえ傑作だ」と、まもなく小杉は大袈裟に叫んだ。

「ぜひおれにフシをつけさせてくれ」

「いいとも。しかしレコードにゃならないぜ」

「そんなこと問題じゃねえ。くれないのうすい布なんて泣かせるじゃねえか。もらったよ」

口先だけではなく小杉には氣に入ったらしく、その晩のうちに一氣に作曲してしまったのだった。

六月六日、水曜日の夜、小杉に誘われて赤坂のナイトクラブに連れ立って出かけると、『女の花びら』という題がつけられて、例の詩がちゃんとシャンソンに仕上げられていた。

ナイトクラブやキャバレーなら、それほど刺激的な歌詞とも思えない。大井は小杉の才能と商売氣にあらためて驚嘆した。

歌手は陣場希美江。伴奏はアーサー・クインテット。リーダーはピアノを受け持っているアーサー・沖田である。

「ジンも沖田もこの曲がすごく氣に入っちゃってるんだ」

と、小杉はいかにも嬉しそうに笑った。ジンとは陣場希美江のことである。

その後、『女の花びら』は、たちまちのうちに客たちの間にも好評を博するようになった。許してくれる、許してくれない——というあたりが殊に氣に入っ

たらしく、その個所へくると唱和する連中も少なくな
い。大井や小杉のほうがむしろ当惑するほどの大した
人気であった。

実は、大井にとっては、当惑どころの騒ぎではな
かったのだ。その唄がもてはやされるに従って、大井
次郎へのどすぐろい殺意が、かれの知らない場所で次
第に醸成されつつあったのである。

大井次郎の作品には、どの歌詞にもかれの経験がこ
められているという伝説があった。それを裏書きする
事実を、某週刊誌のトップ記事で取り上げられたこと
すらあった。そして、かれはそれを真向うから否定し
たりしなかった。まさしく事実だったからである。

とすると、『女の花びら』も同断ということだ。か
れが紅いバンティの女と交渉をもったのは事実がちが
いない——かれを知る連中はみんなそう信じた。拒絶
された、とは信じなかった。くれない、は単に紅と語
呂を合わせたに過ぎないと解釈したからである。それ

に、名うてのドンファンが拒絶されるはずはないとい
う考えも行き渡っている。

さらに、その事実が演ぜられたのが六月二日の夜に
ちがいないということも、『思案損』の従業員や定連
の口から四方八方にばら撒かれてしまったのだった。

悲劇が発生した。

『女の花びら』のモデル——つまり、その夜大井次郎
の相手をした女は誰かということが、問題になったの
だ。

常日頃から大井ととかくの噂があり、しかも紅い下
着をもっていて、さらにその夜のアリバイが不明確な
女性は全部、そのモデルに擬せられるという結果に
なってしまったのである。

彼女たちは当然のこのように、彼女たちの夫や愛
人たちから厳しい疑惑の視線を注がれる羽目におち
いった……。

つまり、そうしたことが背景となって、いまや、大

井次郎の周囲には殺意の気配がたちこめているというわけなのである。

2

大井次郎にしてみれば、とんでもない濡れ衣といいたいところである。

その夜に限ってかれは潔白だったのだ。
その潔白は紅いバンティで染められちまって、桃色になっていたんじゃないのか、などと冷やかされたりすると、真実泣きたくなるのである。

しかし、かれは、かれを信用しない連中よりも、かれ自身の行状をこそ恨むべきであろう。なにしろ一応女でありさえすれば、かれにとってそのほとんど誰もが欲望の対象になってしまふのだから困る。

かといって、いまさら過去を悔いても仕様のないことだ。

焦眉の危機に至ったいま、とにかく、一刻も早く相手をつきとめることしか残されていない。

「へいったい、どこの誰がおれを狙っているのか！」

かれは、一人、二人、と心当たりを数えてゆく。

現在つきあっている女性の数は十指に余った。しかも、彼女たちのほとんどが、紅い下着を持っていそうな女性ばかりなのである。

そして、かれらの生命を狙っているのはおそらく彼女たちの夫、もしくは愛人にちがいないのだが、あるいは彼女たち自身かも知れないという気もする。

つまり、二十人以上の男女のうちの誰かがかれの生命を狙っているわけになる。

——いつまで脅えていても仕方がなかった。

かれは、自分のほうから、それとなく彼女たちのひとりひとりを訪ねて歩くことにしようとした。刑事のように次第に範囲をしぼっていった、目指す相手を探し出そうというわけである。それ以外に方法はなさ

そうであった。

六月十八日は久し振りに晴。夜になると星を眺めることが出来た。

大井次郎は午後八時頃、新橋のデルクス・レコード本社を出ると、銀座四丁目の方へ向かって歩いていった。松坂屋の交差点を左へ曲がったところに『思案損』があるのである。

「わあ、大井さん！」

松坂屋の前にさしかかったとき、かれはいきなり嬌声に度胆を抜かれた。

石川夫人であった。

夫人は、その七十キロの体重を、からだごと体当たりさせるようにして、かれにとびついた。

かれは思わずよろけそうになるのを、軽いステップで辛うじて踏みこたえた。

「しばらくですわね」

「なに暢気なことを言ってるのよ。なんとかして会い

たいと思ってあたし苦勞したのよ。いいえ、会いたいというのはブノ意味じゃなくって、困ったことが出来たからなの。それが大変なことなのよ」

「というと？」

「うちのひとがね、あんたをダンブカーで轢き殺してやるっていきまいてるの」

「なんですって！」

「とにかく、すごい剣幕なのよ」

体重相応に、声量も豊富であった。興味ありげな視線を周囲に感じた大井は、夫人を促して歩きはじめた。

「ぼくを殺すっていうんですか？」

「そうよ。はっきりそう言ったわ。どうやら『女の花びら』のモデルをあたしだと思ひ込んじゃっているらしいのよ」

「ばかな！ ぼくは第一、もうひと月以上も奥さんとお会いしてないじゃありませんか」

「でもうちのひとがそれを信用しないんだから仕様が
ないわ」

「でたらめきわるな。とんだ災難だ」

「でも、実績はあるんだから、あなただってそんな強
気なことは言えないはずよ」

大井はしょぼんとなった。

「まあ、とにかく、晚めしでも食べながらゆっくりお
話を聴くことにしましょうよ」

「晩ごはんなら」と、夫人は答えた。「ホテルへ行っ
てからおすしでもとることにしない？ 最近、そんな
わけで遊ぶ時間がひどく窮屈になってるのよ」

石川夫人は、石川砂利販売株式会社の社長であつ
た。五台のダンブカーをフルに操業していて、業績は
相当あがっているという噂である。

「しかし、奥さんが亭主にやられるなんておかしい
じゃありませんか」

夫人の夫は運転手——つまり、彼女の部下のひとり

なのである。仕事においても、家庭においても、彼女
は夫を十分に飼いならしているはずではないか。

「ところが最近、かれは野性に眼覚めたのよ。あたし
の紅い下着を見たときから、ひとが変わったように荒
らっぽくなっちまって、あたしの方がたじたじ」

夫人は三十九歳であつた。なぜ紅いパンティなど恥
ずかし気もなく穿く気になったのか、と大井は思わず
苦笑したくなるのである。

「まるでスペインの闘牛だな」

「笑いごとじゃないわ。あたしに浮気させまいとして
殺気立つてるの。ほんとにあんた殺されるかも知れな
いわよ」

「脅かさないでくれよ」

「いいえ、脅かしじゃないわ。だから、これからなる
べくダンブカーには気をつけるようにしてちょうだい
ね」

夫人はしみじみとした口調でいうのだった。